

語り継ごう、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう

ひと街じと

No. 13



二〇〇五年 秋(年四回発行)
発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL(011)561-1597

編集：ひと街じと刊行会

北海道不動産会館四階
札幌市中央区北一条西十七丁目

(有)編集工房海内
TEL(011)633-1651

水場のひとときまた、
世間話の花を咲いて

地域の人たちの、日常のささやかな交流の場がなくなり、町かどから話し声や笑い声が途絶えて幾年月。特に、水を汲んだり洗い物をしたりしながらの井戸端会議は、その言葉だけが残ったようです。

米研ぎ、野菜・食器洗い、洗濯——朝夕の近所の水場でのひとときは、女性にとっては楽しい時間でもあったでしょう。八戸市のある洗い場ではかつて、女性たちが洗濯しつつ口ずさむ歌が、時に大合唱になることもあったそうです。水道整備が十分でないこともありましたが、そんな不便を不便とも思わなかった時代ではなかったでしょうか。

秋も日に日に深まる季節。いまでは住宅街ではほとんど見られなくなったのが大根干しです。その大根をみんな洗いながら、長い冬を迎える気持ちの準備もできていったものでした。



琴似栄町通を晴れがましい姿で行進するコトニ屯田兵パレード

西区の発展はここから——琴似屯田兵屋



屯田兵の遺産

琴似に入植 百三十周年、 子孫が進める 地域づくり。

道外ではもはや知らない人も多い屯田兵という言葉
北海道ではその系譜が脈々と受け継がれ
最初の入村から今年で百三十年を迎えました
パソコン万能の時代に
トンデンヘイの響きが心地よいのは
いかにも北海道というところでしょう



沿道の人たちも小旗を振って——

後半は庶民層にまで広がり、一旗揚げようとう夢を抱いてやってくる人も多くなりました。

最後の入植となる明治三十二年（二八九九）までの二十四年間に、全道に三千七の兵村が置かれ、入植した屯田兵は七千三百三十七人。札幌市内では寒、山鼻、新琴似、篠路にも兵村がありました。

すべての屯田兵の名前と出身地がわかっています（出身地は七人が不明）ので、地方別に見てみますと、

- 東北 一四三九人 関東 七〇人
 - 中部 一六八三人 近畿 七五〇人
 - 中国 一〇八七人 四国 一一二六人
 - 九州 一一四七人 北海道 二八人
- という内訳です。

一大決心の後、慣れない酷寒の地での大自然との闘い。どんなに大変だったかは、書物等で見聞きもするところですが、いささか想像の及ばないのが北海道の入植地までの経路。東北からの船を小樽で下りてそこから歩いたという琴似入植はともかく、九州からなどどうやって来たのでしょうか。

ちなみに明治三十一年、九州からオホーツク海沿いの上湧別兵村に入った人たちの経路を調べてみました。

「上湧別町史」によりますと、一行は同年八月七日、九州の門司港を出発。以後、尾道—神戸—堺—四日市—萩の浜（仙台）の各港で志願者を乗せ、津軽海峡—宗谷岬—網走—湧別とたどっているようです。湧別着は八月三十日。実に二百三十日間という長い船旅です。



改めて130年の歩みを見ようと歴史パネル展には大勢の区民が——

上湧別町は現在、一大チューリップ公園で有名ですが、屯田兵の労苦がここに結実しているといってもよいでしょう。そして西区琴似。すでに屯田兵の六代目か七代目に入っている時代に、パレードの二十人分の軍服を復元したのは琴似でリフォーム店を営む女性、JR琴似駅では駅員が屯田兵姿で窓口業務など、地域が一体となって歴史イベントを盛り上げています。

西区民センターで行われた歴史パネル展で配布された今は昔、小話集にも、ちよつといいコラムが……。琴似小が開校百二十周年を迎えたときに、校舎の掲示板に「おばあちゃんが通った学校、お母さんが通った学校、そして私が通う学校」という内容の詩が掲げられていたというのです。コラムの筆者の家では父が通い、自分が通い、息子が通っていた。地元小学校のあり続けることの素晴らしさを味わったと結んでいます。

屯田兵の子孫がここに住み、暮らし、歴史が脈々と受け継がれていく——地域とはそういうものという好例でしょう。



西区民センター前に第一中隊が整列

新 聞では小さな扱いでしたが、屯田兵四代目の中隊長を先頭にメインストリートを行進する仮装隊の人たちの晴れがましい顔——八月二十七日、「かがやけコトニ—屯田兵の里まつり」のオープニングでした。札幌市西区の琴似地区は明治八年（一八七五）、北海道で最初に屯田兵が入植したところ。今年はその百三十周年というこ

とで、パネル展や歴史講演など様々なイベントが行われました。

そもそも屯田兵とは、明治政府が北辺の守りと北海道開拓を兼ねて、志願者を送り込んだ制度。当初は旧士族授産の色合いも濃かったのですが、

風邪のひき始めによく服用される葛根湯錠の成分を見てみると、カッコン、マオウ、タイソウ、ケイヒ、シヤクヤク、カンゾウ、シヨウキヨウといった生薬の名前が書いてあります。知っているのはシヤクヤクぐらいで、他はどのような形状をしているのかさっぱり。でもここへ来ればそれがわかるばかりでなく、六百五十種、二千五百点にも及ぶ生薬のコレクションを見ることができるとです。

そもそもは札幌市北区で漢方薬局

懐かしいもの、面白いもの、珍しいものを探して歩くシリーズ——
体に良い自然のものがことさら見直されている近年
薬の分野でも漢方とか生薬といった言葉をよく耳にします
今回は全国でも珍しい生薬のコレクションを訪問

いやしの漢方ワールド 生薬が二千五百点

を営んでいた故真庭輝嗣さんが資料館を設立する目的で収集していたのです



整然と並んだ六百五十種、二千五百点に稀少価値が伺えます



サイの角と高麗人參。右下はセンザンコウ



午前10時～午後4時
土日、祝日は休み
入館無料・要予約



が、真庭さんが志半ばで病に倒れ、親交のあった豊平区の医師で北部製薬社長の小笠原正昭さんが後を引き継ぎ、私財を投じて平成三年（一九九二）に開設したものです。

薬にならない動植物はないと思わされるほど様々な生薬が整然と展示されており、珍しいものがたくさん。ワシントン条約でもはや日本に入ってくることはない「犀角（サイの角）や「虎骨」、センザンコウ。聞いたことのあるものは熊の胆、麝香など。猿の頭、土竜なども薬になるなんて知ってましたか。

植物ではよく知られるのが人參。おそろくこんなに大きなものは他にないというのが、長さ五〇センチ程の細い中国の天然人參です。高麗人參の数十倍の効能があり、高価なだけにこれ一本掘り当てれば一生遊んで暮らせたとか。

専門家や製薬関係の人が勉強に來たり、台湾からの団体の見学があったり。中には主婦が、いつも祖父が裏山から採



理科室を思わせる展示。貴重な文献の数々も（左）



漢方薬に興味のある方はもちろんですが、体に良い自然のものだけに、一巡りするだけでなんとなく身も心も癒されたような気分になる、不思議な空間です。

取ってきて煎じて飲んでいる薬草の名前を調べに來たりとか。同様の施設は全国に数箇所あるそうですが、いずれも學術展示が中心。標本をここまで集めているところはないようです。

最後に着物を着た日を覚えていきますか。冠婚葬祭や茶道・華道などの稽古でもない限り、大多数の日本人が着物を日常的に着る機会は、ほとんどなくなりましただも、海外では民族衣装としての着物の美しさが評価されていますし、近年は、若い女性が火付け役となって、浴衣ブームが起きています。今、ゆつくりと、そして静かに進行している着物ルネッサンス。伝統の着物に新しい風を吹き込む呉服業界の動きを追ってみました。

新しいブームの予感、リサイクル市やポリエステル製の人気。

静かな古着ブーム

札 幌中心部のデパートの催事場で開催された「きものリサイクル市」。約二千点の着物、帯、和装小物がズラリと並びます。価格を見ると、状態の良い正絹の着物はさすがに三万円〜七万円の値が付

いていますが、ワゴンの中のポリエステル素材の着物にいたっては、何と二千円前後。着物を着慣れた様子

の年配の女性から、珍しさに引かれて立ち寄った若い女性まで、会場内には常に二十人前後が。このリサイクル市を主催したのは、道内最大手の呉服問屋の(株)和光。同社の田中傳右衛門社長によると、

こうした古着リサイクルの取り扱いは、全国的にもこの五年間で一気に増えたそうです。

人気の秘密は、まず価格がリーズナブルなこと。そして何よりも、仕上がった着物は袖を通したときのイメージを描きやすく、買ったその日から着て楽しめること。言うまでもなく、昔ながらの反物からの仕立てには、一カ月ほどかかり

ます。また、目の肥えた女性にとっては、掘り出し物を探すという、二点もののお宝発見」の楽しさもあるのでしょう。

デパート等の呉服売場や専門店の廃業・縮小が著しいのとは対照的に、拡大するリサイクル市場。年配の女性が、「古い」と敬遠する

大正ロマンの古着を若い女性が好んで着たり、古い着物を洋服にリフォームしたり。今、着物ルネッサンスともいうべき和への回帰が、静かに進行しているようです。

市場規模は4分の1に

目 本家屋の建築様式や能狂言に代表される伝統芸能など、



「きものリサイクル市」の一角に設けられたリサイクル着物コーナー。デパートの催事場で開催された「きものリサイクル市」の様子。

着物に限らず現代に通じる「和」の原型が確立したのは、約六百年前の室町時代のころといわれますが、日本人は万葉の昔から、花鳥風月を愛でる心を暮らしの中に取り込み、独自の文化を熟成させてきました。

劇的な変化が訪れたのは、鎖国が解かれた明治維新。鹿鳴館に象徴される文明開化を幕開けに、生活の洋風化が一気に進んだのは、周知のことです。着物についても例外ではありませんが、大正、昭和へと時代が移行するに従って、一般庶民にまで洋装が徐々に浸透してきます。

ですから、今のスタイルの着物の全盛期は大正から昭和初期。現代人の目から見ても実に華やかで、高い技術で染められたり織られたりした着物を見ると、当時の女性のお洒落を競った姿が容易に想像できます。

若い女性の動向がカギ

そして昭和二十年の敗戦を経て、着物文化は一時衰退しますが、皇太子ご成婚の昭和三十年代には、空前の消費ブームに乗って、着物ブームも訪れます。続く昭和四十年代後半から五十年代半ばには、団塊世代が消費を牽引したこともあって、年間消費高は二兆円にも上りました。ただ、このころから、着物は普段着から冠婚葬祭のときに着る衣裳やお洒落着へと変わっていききました。平成の現在は、五、六千億円の市場規模へと縮小しています。

そ して平成に入ってから静かなる和のブーム。呉服業界でも近年、和の伝統を重んじながら現代人のライフスタイルに合致した商



古着は 当たり前 だった？



●江戸時代の着物事情

着るものといえば今でいう着物しかなかった江戸時代。時代劇などを見ると、登場人物はなかなか粋に着物を着こなしているようですが、実際のところは、一般庶民がお洒落を楽しむのも楽ではなかったようです。

というのも、布地がとても貴重で高価だったから。江戸風俗研究家の故・杉浦日向子氏の「お江戸風流さんぼ道」によると、当時の人々が着物を新調するのは、現代人が新車を買うのに近いぐらいの感覚だったとか。ですから、長屋暮らしの庶民は一生のうちに3、4枚を新調して、あとはお下がりだったり、古着やレンタルなどで済ませていました。衣類はリフォームしながら長く着るといのが当たり前だったのです。

昨今は「もったいない」という言葉やリサイクルが新しい取り組みのように言われていますが、物を大切にすることは、江戸時代や明治時代はいうまでもなく、祖父母の世代までの日本人は、当たり前に行っていたこと。昔の人の生活習慣には、学ぶべきことがたくさんあるようです。

品の開発や企画を提案しています。その一つが、ポリエステル製の着物。昔は各家庭にたらいがあつて洗い張りをしましたが、忙しい現代人には、洗濯機で簡単に丸洗いできるという手入れの容易さをアピールすることも重要です。

でも品質は？、いいえ、ポリエステルと侮るなかれ。技術も進歩して、「これがポリエステル製？」というほど風合いの良い振袖が店頭で並んでいます。こうした振袖はブレタ

ポルテなので、価格を低く抑さえることができ、若い女性でも、スーツを一着購入するような感覚で手に入れることができます。前述の(株)和光でも、伝統的な呉服販売とは別に、若者の消費動向に注目。今年の春、若い女性をターゲットにした店舗(アントルポ・ドウ・ハナ)を札幌駅前店に続いて中心部にもオープンさせました。着物に対する先入観のあまりない女子高生が昨今の浴衣ブームの火付け役となった



ことを考えると、また新たな感覚の着物ブームが若い世代から始まってく予感も。しかし、何より力を入れなければならぬのは、これを一過性のブームに終わらせることなく、着物という伝統文化を次代に伝えていくソフトの部分でしょう。長年にわたって着物の着付け指導に携わっている、札幌きもの着付け愛好会の玉井雅子会長も、着方を含めて、着物の知識や伝統を母親から娘へと伝えていくことが、伝統文化を守ることにつながる」と言います。同愛好会では、着付けを指導するだけでなく、織元への見学旅行や歌舞伎鑑賞など、卒業生に着物文化に触れる機会を提供する努力を重ねています。

（タンスに眠っている着物や帯を）
もう一度、活かしてあげてください
「和ものや傳」



今年の春オープンした
entrepôt de HANAポ
ルタウン店

道内最大手の呉服問屋(株)和光では、リサイクル着物の買取、販売を行っています。その名も「和ものや傳」。

昨今は、一般の古着屋などでも着物が売られているようですが、不要になったものとはいえ、その価値が分かる業者の手を経て、大切にしてくれる人の手に渡してほしいもの。「和ものや傳」では、呉服の専門問屋ならではの確かな眼で価格を査定し、丸洗いで汚れを取り除いてから販売しています。販売形態は、同社が着物や帯を預かって販売

する委託販売と、完全買取りして販売する買取販売の2通り。販売に関する費用は同社の負担です。

昨今のリサイクルブーム、せっかくの着物や帯をタンスに眠らせておく手はありません。不要になったお手持ちの着物をどなたかに着てもらいたいとお考えの方は、「和ものや傳」までお問い合わせ・ご連絡を。

●「和ものや傳」
札幌市中央区北5条西11丁目14
(株)和光 内 Tel 011-251-5291

（「自分で着物を着てみたい」
そう思ったら
札幌きもの着付け愛好会の教室へ）

着物を買ったら、昔の女性のように自分で自由自在に着こなしたいもの。着物を着るたびに美容院や専門家に頼ることなく、自分で着られるように着付けを習ってみませんか。

札幌きもの着付け愛好会(玉井雅子会長)では、無料の「きもの着付け教室」を開催しています。自分で着たことのない初心者から、少しは着られるけれど正式に習いたいとい

う人まで、どんな方でも受講可能。まずは、着付けの美技のほか、手入れの方法など着物の基礎知識を幅広く学べる初級コース(週1回4ヵ月間)にトライしてみましょう。

玉井会長によると、最初の約1ヵ月間は覚えることが多くて多少大変ですが、慣れてくると従って必ず着られるようになる。初級コース終了後、さらに深く学びたい方には、上級コースも。また、同愛好会では、着物を着て京都の織元を訪ねる旅など、いろいろなお楽しみも企画しています。

大通り教室、札幌駅前教室の2教室で毎日開講。詳細は同愛好会まで。
●駅前教室:札幌市中央区北2条西1丁目
ピア2・1ビル
Tel 011-223-4107



札幌きもの着付け愛好会の
着付け教室(初級コース)

来た道、 行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ——
スローコミュニケーションを求めて。

築百年の石山軟石の蔵を改造した店舗

札 幌市中央区は山鼻、電車通りから
一步西に入った仲通りに面して、昔
ながらのコチツとした歯ごたえが評判の餅
菓子を守る老舗があります。その名も元
祖・雷除志んこ。築百年の石山軟石の蔵を
改造した店舗が目印です。

三〇平方メートル程の作業場には、蒸し器や
かまど、「どんつき」と呼ばれる石臼と杵の
もちつき機が並びます。ここで、串団子や
大福のほか、屋号にもなっている「雷除志

藤野戸 治さん——
札幌市 老舗「雷除志んこ」

「創業明治元年、 石山軟石の蔵が 四代目の仕事場」

んこ」を丹精込めてつ
くっているのが、職人
歴三十年の藤野戸治さ
ん（五六）。小樽で明治
元年（一八六八）に創
業した初代から数えて四代目になるのだと
か。



長い間、小樽で伝統の味を守ってきました
が、こちらの店舗を開業したのが平成七
年。旅館と質屋を営んでいた美姉の嫁ぎ先
に、古い質蔵が残されていたので、ここを
利用することに。小樽では弟さんが、若松
町に店を開いています。
屋号の「雷除志んこ」の由来は「雷が多



波打ち模様が
雷様を表す
「雷除志んこ」



かった明治のころ、停電の
たびに米を蒸かすタイミ
ングを線香の燃える時間
で計った」とか、「うるち米
百分の餅は囁んでいる時に雷が鳴っても口
から離れないほどコシが強いから」など諸
説が。同名の餅菓子も「雷様の力強さを思
わせる波打ち模様を付けた生地で餡をくる
んだもの。添加物を一切使用しないため、
生地が固くなる寒い季節にはつくらないと
いうこだわりがあります。」
「祖父は、米が悪いと餅をつくらないほど
徹底していました」と、藤野戸さんは餅に
かける情熱もすっかり受け継いでいます。

元祖・雷除志んこ
札幌市中央区南13条西7丁目1-22 TEL011-531-3390
幸乃園安中茶舗
札幌市中央区狸小路7丁目 TEL011-231-1921

本欄への自薦、他薦を
お待ちしております。



米粉をこねて蒸す

店 の外にまで漂うほうじ茶の香りが、
通りを行く人の足を止めさせる幸乃
園安中茶舗。安中静子さんと息子さんの二
人で切り盛りする、今では狸小路唯一となっ
た日本茶専門店の創業は昭和二年のこと。
昭和二年といえ、五丁目に道内初の鈴

安中静子さん——
札幌市 幸乃園安中茶舗

「足を止めさせる 焙煎の香り、 外国人は急須に」

蘭外灯が設置された年。そんな老舗が創業
以来続けているのがほうじ茶の自家焙煎。
午前十一時過ぎには静子さんが店舗の一角に
据えてある焙煎機に向かいます。その煙の
せいでしよう、店内の茶箱はすでに焼け焦
げたように変色。香りも浸み込んでお客さ
んの鼻をさすります。

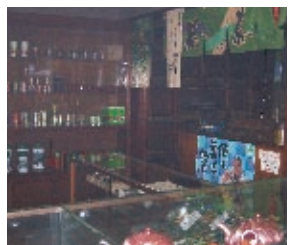
その静子さんよりずっと早く、十五年ほ
ど前まで母親と店を見てきたのが姉の名越
幸子さん。戦争によるお茶の統制、配給
も経験していますから、界限の歴史にも詳
しい「生き字引」の一人。二番売れたのは、
40年程前に改装したまきりの
いかにも古いたずまい



ずらりと並ぶ急須が
外国人観光客に人気
高いものを好むとか



炭釜の景気が
良かったことで
しょう。地方か
ら馬車で何百本
も買いに来まし
たよ。花柳界も
華やかでしたか
ら」と昔を振り
返ります。



老舗ならではの
焙煎の煙が店内に

専門店に買いに来る人が減り、ペットボ
トル入りが幅を利かせる時代に、お茶屋さ
んが生き残るのも大変です。古くからのお
得意さんが多く、市内一円に配達もしていま



年代物の焙煎機。炒りたてはとくに香ばしい

すが、静子さんも「息子が後を継いでくれ
る点では安心ですが」と前置きして、対策
を考えざるを得ません。

こちらの特徴は自家焙煎ともう一つ。そ
れは急須を中心とする茶器類が豊富なこと。
買い求めていくのが、じつは外国人観光客
や学会などで札幌に来た人たちというので
すから、何か意外な感じがします。開閉式
のアーケードも六丁目までで少し寂しい七
丁目ですが、こんなところにも賑わいを取
り戻すヒントがありそうです。

地域

共に

曙振興会(東屯田通り)

琴似、篠路 発寒：札幌には屯田兵ゆかりの町が数ありますが、中央区にあつて古き良き時代の札幌の面影を残している地区の一つが、市電の走る山鼻地区でしょう。さすがに歴史を重ねた商店街が多いのですが、このほど訪ねた東屯田通り沿いの商店街(曙振興会)は昭和元年の設立。今年が八十周年の節目となります。

昭和の歴史を見つめて

中央区南八条から十二条の東屯田通り沿いに続く曙商店街。昭和元年に約三千件の商店でスタートした「東山鼻睦会」が、終戦後の町名変更に伴い「曙振興会」と名称を変えました。この商店街の変遷は、昭和の歴史そのもの。物資が不足した戦時中や戦後の混乱期にはさすがに停滞しましたが、昭和二十五年の朝鮮戦争で日本中が軍需景気に沸くと、活気を取り戻しました。「石油ショックのころまでが商店街の最盛期でした」と同振興会の上宮實会長は振り返ります。昭和五十年の五十周年には会員は百二十六社にも。まさに高度経済成長とともに歩みを進めたといえます。



その崩壊、拓銀の破綻。商店街もその余波をもろに受けることに。商売が成り立たず、廃業して地域を離れる人が増えていきました。現在の会員数は約七十件にまで減り、最近では廃業する店舗の数が増え続けているとの話を聞くのは、何とも寂しい限り。廃業した店舗の跡



戦前からある大場豆腐店、武藤金物店



曙振興会の上宮實会長

地にマンションが建設されたり、コンビニや本州資本のパチンコ店が進出したりと、街の様相も変化しています。でも、戦前から続いている店も十件ほど。それぞれの会員が高齢化と後継者の問題を抱えながらも、頑張つてシャッターを開けています。「だからこそ、皆が力を合わせて盛大に執り行います」と上宮会長も言う、今年十月の八十周年記念式典と祝賀会。一人ひとりが商店街の歴史の重さをかみしめるひとときです。これからは百年の節目に向けて、時代の変化を見守り続けていくことでしょう。

本づくり

ここで調べる

文化財の資料館で定鉄関連のものも

旧黒岩家住宅(旧簾舞通行屋)

同じ調べものをするにしても、散策を兼ねて楽しみなが

らできれば足も軽くなるというもの。札幌市の有形文化財でありながらあまり知られていない旧黒岩家住宅です。

明治初期、有珠から札幌まで行くルートの一つだった本願寺街道。明治五年、この街道を通る旅人たちの休憩所として建てられたのが簾舞通行屋。守役となったのが福岡県出身の黒岩清五郎でした。通行屋の廃止後は同家の住宅として使われ、現在は郷土資料館にもなっています。



館内には、農地や造林のための開発が盛んに行われた時代の暮らしの様子が見られます。また、たなつかしい定山溪鉄道関連のものも多く、一見の価値が。

●所在地／札幌市南区簾舞一条一丁目
●電話／五九六一二八二五
●観覧／九時～十六時 年末年始と休日祝日の翌日は休み

相談室

会社の今後については、社会経済の現状からあるべき姿を社長が語る。あるいは専門家による将来分析等の寄稿でよいでしょう。

こうした試みも、さしたる広がりがないとなると、たとえば会社(製品)と消費者をつなぐ小冊子



の検討です。原材料や製法、流通過程などについて、消費者が読んでも面白いと思われる事柄をわかりやすく編集するのです。それを消費者に無料配布することで会社に対する理解をさらに深めてもらうというものです。

いずれにしても一度、専門家に相談されるとよいでしょう。

Q 記念誌刊行したいが資料類がまったくない

私の会社は来年、創業20周年を迎えます。記念誌等の刊行を指示されていますが、社内に資料や記録類がほとんどなく、どうすればよいのか困っています。

A 業界団体の記録や行政の動き調べて

まず考えられるのは20周年記念誌ですが、資料類がないとのことですので、ここまでの歩みをどう記すかが問題です。

それには、業界団体で業界の流れを調べて、それに行政の動きや新聞記事等も加え、おおまかな年表を作ります。その年表を基に、古い社員の座談会や聞き取りで会社の状況を思い出してもらうことです。写真や資料類の提供も頼んでみましょう。

現在約70件が頑張つてシャッターを開け続けている



何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。



いにしえから未来へ。

歴史の時計は、いにしえに思いを馳せることでその音が聞こえてくる――そんな気がするのが札幌市西区役所そばにある屯田の森の時計です。時計そのものは昭和六十一年設置と、比較的新しいものですが、この場所に二面で紹介した琴似屯田兵の中隊本部があったという由緒とつながって、あたかも百三十年の時を刻んでいるかのようです。ヤチダモやシナなどの大木の陰には、いずれも屯田兵関係の四基の記念碑が。琴似本通りをはさんで向かい合う琴似神社と一体となった、まさに西区のシンボルゾーンです。時計基部に刻された言葉は「希望」。



屯田の森

編集室

書くのは「いま」

再び満州の体験記を手伝っています。三人の筆者は八十歳前後の方ですが、おぼろげな記憶をたどりながらも何とか形にして残したいと一生懸命です。高齢になるとなかなか筆を持つことができなくなるのは、知っている方に差し上げた記入式自分史年表が、いまだ真つ白のままというところでもわかりますので、原稿を仕上げた方のご苦労がしのべれます。

記憶と気力が年齢とともに衰えていくことは誰も同じです。家族に話していなかったこと、書き残しておきたいことをまとめるのは、いま、です。

十年後の読書

ブログという言葉が新聞紙上を賑わわせています。日記形式のホームページというのですが、その利用者はすでに百万サイトとか。紙に文章を書いたり、本を読んだりすることは苦手でも、パソコンによる情報の送受信は大好きという人がいかに多いかということでしょうか。

ブログを編集した本がまたベストセラーになるというのですから、メディアの世界はまさに混沌。本離れが言われるのに、相次ぐ大型書店の閉店もまた同様です。果たして十年後の読書は、どんなスタイルが主流になっているのでしょうか。

ナツメロの「美」

素晴らしいは「やばい」、不快は「つぎい」、迷ったら「微妙」などとい



う文化庁の言葉調査の結果。いままら乱れを嘆いても仕方ありません。それよりも美しい言葉を残すことに気を遣ったほうがよいような気がしますが、前出の満州で思い出しましたが、「かえり船」というナツメロの一番は、波の背に揺られながら帰る月の潮路です（大意）。タンゴの「小雨降る路」には濡れをほつ、涙しくむなどの古語が。

ナツメロが好きなのは、古い詩の中に日本語の美しさを発見されるはずですよ。どうぞ歌い続けてください。(海)

● 自分史セミナーの「出前」します

印刷紙工では毎年、定期的に本づくり講座を開いています。都合で来られなかったり、お仲間だけで話を聞きたいという人のために、本づくりセミナーの出前を行っております。三人以上のお集まりで、会場をご用意いただければ、日時を相談の上、編集者と印刷担当者がお伺いして、いろいろとアドバイスをさせていただきます。

● 記念誌づくりもお手伝い

企業や団体の節目の設立周年（二十周年、三十周年…）にちなんだ記念誌づくりもお手伝いいたします。企画から承ります。

● 小紙をお送りします

小紙をご希望の方には、定期的に無料でお送りしております。印刷紙工までお申し込みを。